

ドイツは著名な思想家や哲学者を大勢輩出しているのに、ヒトラーの政策と演説に酔い痴れ、ヒトラーへの忠誠に国中が飲み込まれていったことが不思議でならない。日本においても、天皇を「現人神」とする絶対的天皇制が確立されていった。ヒトラーは、神懸かりの天皇制を持つ日本の権力構造を羨ましく思ったそうである。

日本大学の小野雅章教授が『教育勅語と御真影 近代天皇制と教育』を上梓している。「はじめに」に、1943年、「学校防空指針」では①御真影、勅語謄本 ②学生生徒及び児童 ③貴重な文献 ④校舎の順に防護、保護とされていることを書き出している。生徒の人命より天皇皇后の肖像写真の御真影、勅語の謄本の方を優先しているわけである。また、学校で火災が起こった時、校長は御真影救護のために火中に身を投じ、殉職した事件があった。これに対し「国定思想の代表的発現」「国家のための大慶至極の次第」などの評価があった。反対に「御写真のために生命を殞すといふことは、陛下の御心ではなからうと思ひます」「謹んで御真影はすべて宮内庁に奉還し万全の場所に安置し奉らん」と、御真影が不要であるとの主張もあった。上記の出来事は教育現場における天皇制を映し出している。小野氏は、天皇制をどのように生徒たちに教育してきたかを歴史的に分析している。

明治政府は、国家の統治者としての天皇を浸透させるため、視覚化の必要性から、天皇の全国「巡幸」を、全97回行った。しかし、物理的に限界があり、天皇・皇后の肖像写真を全国の官公庁や軍事施設に「下賜」することにした。これが「御真影」で、全国の学校にも「下賜」されていった。1890年10月に井上毅らが起草した「教育に関する勅語」が発布された。小野氏は、教育勅語の特徴は「日本の教育理念の淵源（根源）を良心や神にではなく、国体主義にもとづいた歴史的な存在であると同時に現在の政治の主権者である天皇・天皇制に求めている」と分析している。教育勅語も学校に配布され、「奉読式」が行われた。学校の諸式典で、「君が代」斉唱、「御真影」への最敬礼、「教育勅語」の奉読が執り行われるようになった。当初、これらの式典は穏やかなものであった。

日清、日露戦争に勝利し、日本は国際化していき、権力の集中が求められた。教育勅語を規範にした修身教育が進められ、小学校在学中に教育勅語の暗誦が義務づけられた。国定教科書は国体主義に基づく天皇・天皇制教化へと変容していった。明治天皇の逝去後、大正天皇の即位礼の時から、万歳三唱、国旗の掲揚が普及した。大正天皇夫妻の御真影が全国の学校に配され、御真影と教育勅語謄本の盗難や火災から守るために「奉安殿」が設置された。大正天皇の逝去後、昭和天皇の即位式は全国で大々的に行われた。御真影は必要不可欠、天皇制国家における国民統合の「装置」として重要な影響力を持つようになり、同様に、国旗掲揚も国民統合として、強く意識されだした。天皇機関説を「国体を破壊するようなもの」と攻撃し、教育・学術界は一挙に変容していった。国体明徴運動へと進み、「教学刷新の中心機関」を設置し、日本は祭祀と政治と教学は一体不可分の関係にあるとした。「宮城遥拝」の強制が加速し、国体主義に基づく神格化された天皇への無尽の忠誠が求められ、天皇信仰を身体化する体制が成立した。教育勅語の「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」の信仰が国民に刷り込まれ、国体護持を至上命題とする天皇制は完成した。

この信仰に基づき、アジア・太平洋戦争が敢行された訳である。ヒトラーの台頭は、第一次世界大戦の多額な賠償金に遠因があるとも言われるが、彼のドイツ民族の優秀さをくすぐる巧みな演説がナチズムを造ったのではないか。日本は、教育勅語と御真影を強引に、また、巧みに用いた教育が、ヒトラーが羨む天皇制ファシズムを生み出したのである。